

Title	敦煌変文所見目連説話と『仏説目連救母経』について：そのモチーフとディテールを中心として
Sub Title	Dunhuang transformation texts on the legends of Mahamaudgalyayana and Foshuo Mulian jjiumujing
Author	渋谷, 誉一郎(Shibuya, Yoichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.149- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

敦煌変文所見目連説話と『仏説目連救母經』について

——そのモチーフとディテールを中心として——

渋谷 誉一郎

はじめに

筆者はさきに『仏説目連救母經』（以下『救母經』と略称）と『目連報本懺法』における目連説話のプロットおよび修辭の比較を通して、後者の前半に引用されている仏典が前者を伝承したものであること、両者の修辭の顕著な特徴が反復表現と定型表現において認められることを明らかにしたが、紙幅の都合で、そうした特徴の源流とされる唐五代の敦煌変文との関連を考察することができなかった。本稿ではその欠をいささかでも補うべく、『救母經』を中心として変文との継承関係について、主にはそのモチーフとディテールについて少しく検討を加えてみたい。

いわゆる敦煌変文における目連説話を主題とした代表的な作品には、『目連縁起（真題）』『大目乾連冥間救母変文（真題）』（以下『救母変文』と略称）があり、本稿ではこの二点を主たる考察対象とした。他に『目連変文（擬題）』、『五蘭盆経講経文（擬題）』等があるが、今回は取り上げていない。³ テキストは王重民等編『敦煌変文集』（人民文学出

版社、五七年）を用い、句読は適宜改めている。また、原文引用の用字は正字を使用したが行字を使った場合がある。字句等を補った箇所は「一」、校勘は（一）で示した。

（一）モチーフについて

敦煌変文と『救母経』におけるモチーフの比較については先行研究が少なくない。ここでは石破洋氏の目連説話に関する諸論考に注目したい。石破氏は目連の地獄巡りというモチーフの有無にもとづき、各作品の成立時期を、地獄巡りのない『目連縁起』を最初期とし、次いで地獄巡りを有する『救母変文』、そして『救母変文』と同じモチーフを持ちながら叙述がさらに詳細になっている『目連変文』は最後期であるという推論を提起した。そして『救母経』については、地獄巡りのモチーフを有するが、『十王経』の影響が見られないことにより、『救母変文』以前に存在した経典なり説話なりの系統に位置づけている。現存作品に對象を限定して見れば妥當な推定といえよう。この推論に附言すれば、目連の地獄巡りというモチーフについて、目連が母親を探して数々の地獄を遍歴しなければならなかった理由を子細に見ると、『救母変文』と『救母経』の間には異なる点が認められる。そもそも目連の母は慳貪と妄言の罪によって、阿鼻地獄に墮とされる。目連はその母を救済すべく地獄へ向かうが、地獄はいくつもあつて、なかなか母に巡り会うことができない。そのために次々と地獄を訪ねることになるのだが、『救母経』では判確に始まり、劍樹、石碓、餓鬼、灰河、鑊湯から火盆地獄に到るまで、母についての記述がまったくないのである。最初の判確地獄を例に挙げてみよう。

目連次復前行、見一判確地獄。只見南閻浮提衆生、在判確白中、斬身千段、血肉狼藉、每日之中、萬死萬生。

目連悲哀、問獄主、此獄衆生、前身作何罪業、今受此苦。獄主答師、此是南閻浮提、判斷一切衆生、男女盤旋、取（聚）頭共喫、口唱（嘗）甘美。今落弟子手中、只得歡喜忍受。（目連はまた先に進むと、判斷地獄に出た。ふと見ると南閻浮提の衆生が、判斷曰の中でその身がちりぢりに切り刻まれ、血肉は散乱し、毎日幾度となく死んでは生まれる繰り返し。目連は悲しみにくれ、獄主に問う。この獄の衆生は前世に如何なる罪を得て、いまこの苦しみを受けるのか。獄主の答えるに、これは南閻浮提にて判斷せし一切の衆生にして、男女は盤旋し、頭を聚めてともに喰らい、口に甘美を味わっていた。いま、それがし的手中に落ちたからには、歡喜して忍受するしかないのだ。）

とあり、以下、火盆地獄の次の阿鼻地獄に至つてようやく母との邂逅を果たすことになるまで、母に言及されることなく、「目連次復前行、見……、目連悲哀、問獄主、此獄衆生、前身作何罪業、今受此苦。……只得歡喜忍受。」という定型表現を用いて、地獄での責め苦の有様と亡者がその地獄に墮ちた理由が示されるだけなのである。石破氏の「地獄めぐりの部分や、母を阿鼻・黒闇・餓鬼・狗・女人・切利天と次々に救済するところは、説話として適当にアレンジ出来るし、また実際にアレンジされている」と述べるのは、各々の地獄ではその属性の紹介に終始している点に注目されたのであつて、『救母經』の地獄巡りには、母探しというテーマが記述として現れないのは注目すべき特徴である。

それに対して『救母變文』では、目連が銅柱鉄床地獄までやつてくると、母はすでに阿鼻地獄に移送された後であつたという、『救母經』には見られないプロットが存在する。

目連言訖、更往前行。須臾之間、至一地獄。啓言獄主、此箇獄中、有一青提夫人已否。獄主報言、青提夫人、是和尚阿孃。目連啓言、是慈母。獄主報和尚曰、三年已前、有一青提夫人、亦到此間獄中。被阿鼻地獄牒上索將、今見在阿鼻獄中。目連悶絕僻「倒」、良久氣通、漸漸前行、即逢守道羅刹問處。(目連は言い終えると、さらに先に進んだ。あつという間にある(銅柱鉄床)地獄までやって来ると、獄主に申した。「この地獄に青提夫人と申す者はおるでしょうか」。獄主が答える。「青提夫人は和尚の母君か」。目連が申し述べる。「母にございます」。獄主は和尚に答えて言った。「三年前に青提夫人なる者がこの地獄へ来たが、阿鼻地獄へ移送を命ずる牒に従つて引つ立てられ、いまは阿鼻地獄におる」。目連は悶絶卒倒し、ようやく息を吹き返し、ゆるゆると先に進み、道守の羅刹に出逢つて訊ねる場面。)

『救母経』にこのプロットはない。目連の地獄巡りというモチーフの展開に、母を追跡するという内容は見あたらないのである。訪ねた地獄で母はすでに次なる地獄へ移送されて出会うことができなかったというのは、『救母変文』ではこの一例のみにすぎないが、後の明清に到って、鄭之珍『目連救母勸善行孝戲文』を始めとするいわゆる目連戯や目連宝⁶巻における目連の地獄巡りには、いずれも母親追跡という内容がさらに増幅されて、各地獄ごとに認められることは注意すべきであろう。このプロットは目連の地獄巡りというモチーフにさらなる緊張感をもたらし、目連の母親探しにより切実な雰囲気を加える効果を加える。したがって、この特徴は戯曲や語り物という芸能に対してより相応しいと言えよう。周知のように、目連説話を題材とした芝居についての最も早い記録は、宋・孟元老『東京夢華録』巻八「中元」において中元節や盂蘭盆会の殷賑ぶりが描き出される中に、「構肆楽人自過七夕、便般目連救母雜劇、直至十五日

止、観者増倍（劇場の役者は、七夕が終わってから後ずつと「目連救母」の芝居を上演し、十五日で打ち上げるが、この日は倍以上の入りがある）とある。さきに述べたように、明清の目連戯や宝巻において母親追跡のモチーフが広く行われていること、このモチーフが戯曲や講唱においてより効果が期待できるといふ意味で相応しいとするならば、あるいはすでに宋代目連雜劇に取り入れられていた可能性も想定できる。「救母変文」にすでにそのプロットが含まれていたことは注目しておきたい。また、「救母経」に母親追跡の内容が見られないという事実は、石破氏の「救母経」の源流は「救母変文」より遡るものであるという推定を裏書きするものである。

（二）ディテールについて

本章では変文と『救母経』におけるディテールについて検討してみたい。今回取り上げた目連故事は、大きく分けて三つのプロットから成り立っている。まず、第一は目連の母は慳貪と妄言のために地獄へ堕ち、目連は父母の供養のために出家し、母が地獄へ堕ちたことを知る段。第二は目連の地獄巡りの段。「目連縁起」では目連は天眼でもって母が阿鼻地獄にいることを認めているので、個々の地獄を巡る内容とはなっていないが、いくつかの地獄の名称を挙げ、その属性についての簡単な紹介がある。第三は母を阿鼻地獄に見つけて救済し、餓鬼道、畜生道を経て現世から『救母経』と「救母変文」では切利天に、「目連縁起」では天上に転生する。

ここでは第三のプロットの、目連が母を阿鼻地獄から救い出した後、母が餓鬼道から畜生道へ転生する間の挿話を取り上げる。この部分は「救母経」「目連縁起」「救母変文」いずれにも含まれており、比較検討するのに適当である。

まず、餓鬼道において、目連は母に水を飲ませてやろうとしたところ、水が猛火に変じたという内容について見てみ

よう。引用の順序は『救母経』『目連縁起』『救母変文』である。以下同。

目連問世尊、嬢在獄中日久、欲共嬢往來、恒河水邊、飲水洗腹。世尊答言、諸佛飲水、猶如乳酪。衆僧飲水、猶如甘露。十善人飲水、能解饑渴。汝母飲水、變爲猛火、流入腹中、煎煮腹肚俱爛。(目連は世尊に訊ねる。母は獄中におること久しく、母を連れて、恒河の水辺に行き、水を飲ませて腹を洗いたいのでございます。世尊が答える。諸仏が水を飲めば、乳酪の如く、衆僧が水を飲めば、甘露の如く、十善の人が水を飲めば、飢えと渴きを癒される。汝の母が水を飲めば、水は猛火に変じ、腹に流れ入れば、胃も腸も煮焼かれたように爛れるのである。『救母経』)

今有瓊漿香飯、我佛令遣將來、母若飢渴時多、香飯瓊漿便喫。……目連手擎香飯、充濟慈母之飢、奈何惡業又深、爭那慳貪障重、漿水來「飲」、變作銅汁、香飯欲食、變成猛火。(いま、瓊漿香飯ありて、仏の仰せにより携えて参りましたゆえ、母上が長い間飢え渴しておるならば、瓊漿香飯をはずぐに召し上げれ。……目連は香飯を捧げ持ち、母の飢えを癒そうとしたところ、悪業の深さと、慳貪の罪の重さによって、瓊漿を飲まんとすれば銅汁に変じ、香飯を喰らわんと欲すれば猛火に変ず。『目連縁起』)

目連聞阿嬢索水、氣咽聲嘶。思付中間、忽憶王舍城南有大水、濶浪無邊、名曰恒河之水、亦應救得、阿嬢火難之苦。南閻浮提衆生、見水即是清涼之水。諸天見水、即是瑠璃寶池。魚鼈見此水、即是潤澤。青提見水、即是膿河猛火。行至水頭、未見兒咒願、更(便)左手托岸良由慳、右手抄水良由貪、直爲慳貪心不止、水未入口便成「猛火」。

(目連は母が水を求めているのを聞き、気も塞がり声も嘎れた。思いをめぐらすうちに、王舎城の南に大きな河のあるのを思い出した。水量は潤沢無辺で、恒河と称し、母を火難の苦しみから救い出すことができよう。南閻浮提の衆生が水を見れば清涼の水。諸天が水を見れば瑠璃宝の池。魚鼈がこの水を見ればそれは潤いのある沢。青提が水を見ればそれは膿河猛火となる。水際まで来ると、まだ息子が願文を唱えないうちに、左手で岸を支えるのは慳吝がゆえ、右手で水を掬うのは貪欲がゆえ、慳貪の心が已まざれば、水は口に入る前に猛火となった。)『救母変文』

文体はいずれも四字六字を基調とした一種の駢文であることは共通しているが、細かく見れば『救母変文』には破格が認められる。内容について見ると、母が水を飲もうとすると猛火に変ずるというプロットは、本来『孟蘭盆経』や密『孟蘭盆経疏』には見られないものである。『救母経』と『救母変文』では、「諸佛飲水、猶如乳酪。衆僧飲水、猶如甘露水」あるいは「南閻浮提衆生、見水即是清涼之水。諸天見水、即是瑠璃寶池。魚鼈見此水、即是潤澤」というように、飲料の効用や価値を比喩的に表現している。両者の内容は等しくなく、『救母経』より『救母変文』がより豊富な内容になっているが、表現形態の一致に注目したい。『救母変文』系統の説話が『救母経』に連なっているのを示している例と見なすことができよう。

次に目連の母が餓鬼道を脱して、畜生道に狗として生まれ変わり、目連がそれを尋ね、邂逅する場面を取り上げる。

目連告佛、我母托何道。佛言目連、雖離餓鬼、托生合在王舎城中、化爲母狗。目連聞是語已、挺鉢往王舎城中、呼覓其狗。狗見目連、走出抱腰懊惱。我是師母、師是我兒。目連問母、今作狗身之苦、如何地獄之苦。狗語目連、

我乍可長劫作狗身、喫人不淨、我怕地獄之聲。(目連は仏に告げる。母は何道に託生されたのでしょうか。私は目連に言う。餓鬼を離れたが、王舎城に託生せられて雌狗と化しておるはず。目連はそれを聞くと鉢を捧げて王舎城に行き、その狗を呼び探した。狗は目連を見ると、走り出で目連の腰にまつわりついた。私は師の母、師は私の息子である。目連は母に訊ねる。いま狗の身となる苦しみと、地獄の苦しみは如何でしょう。狗は目連に申すよう。長劫にわたって狗身となり、人の不淨を喰らうより、地獄の音を耳にするのが恐ろしい。『救母経』)

於是孟蘭即設、供養將陳、諸佛慈悲、便賜方圓救濟、目連慈母、得離阿鼻地獄、免交遭煎苦之憂。蓋緣惡增深、未得「生」於人道、託蔭王城内、化爲女狗之身、終朝只向街衢、每日常食不淨。……於是目連天眼、觀見慈母、已離地獄、將身又向王城、化作狗身受苦。目連心中孝順、行到王城、步步俯近狗邊、狗見沙門歡喜。目連知是慈母、不覺雨淚向前、遂問阿孃、久居地獄、受苦多時、今乃得離阿鼻、深助孃孃。今在人間作狗、如何地獄之時。阿孃被問來由、不覺心中歡喜、告兒目連曰、我在阿鼻地獄、受苦皆是自爲、聞汝廣設孟蘭、供養十方諸佛、今得離於地獄、化爲母狗之身、不淨乍可食之、不欲當時受苦。(そこで孟蘭盆を設け、供物を供え、諸仏の慈悲により、方円の救濟を賜り、目連の慈母は阿鼻地獄を離れ、煎苦の憂いに遭うのを逃れました。しかし悪縁の深さによりて、いまだ現世には生まれず、王城の内に化して女狗となり、終日路頭にありて、毎日不淨を喰らっております。……そこで目連は天眼でもって慈母がすでに地獄を離れ、王城にて狗に転生し苦しみを受けているのを観想しました。目連が孝順の心根をもつて、王城に行き、ゆるゆると狗のそばに近寄ると、狗は沙門を見て喜びます。目連はそれが母と知り、覺えず涙に噎び近寄り訊ねた。久しく地獄に居られ、長きに苦しみを受け、いまやっと阿鼻地獄を離れるこ

とを得、お喜び致します。この世で狗となるのと、地獄の時とは如何でしょうか。母はいわれを問われ、覺えず心中歡喜し、息子の目連に申します。私が阿鼻の地獄に墮ち責め苦を受けたのは自らのせいであつた。そなたが広く盂蘭盆を設け、十方の諸仏に供養したことを聞いておる。いま地獄を離れることを得たれば、化して母狗の身となり、不淨を喰らうも、昔の苦しみは受けとらない。』目連緣起』

世尊、阿孃喫飯成火、喫水成火、蒙世尊慈悲、救得阿孃火難之苦。從七月十五日、得一頓飯已來、母子更不相見、爲當墮於地獄、爲復向餓鬼之途。世尊報言、汝母亦不墮地獄及餓鬼之途。得汝轉經功德、造盂蘭盆善根、汝母轉餓身之鬼、向王舍城中作黑狗身去。汝欲得見阿孃者、心行平等、次第乞食、莫問貧富。行至大富長者家門前、有黑狗出來、捉汝袈裟銜著、作人語、即是汝阿孃也。目連蒙仏勅、遂即托鉢持盂、尋覓阿孃。不問貧富坊巷、行衣（於）（洽）、總不見阿孃。行一長者家門前、見一黑狗身、從宅裏出來、便捉目連袈裟、咸（銜）着即作人語、言、阿孃孝順子、忽是能向地獄冥路之中救阿孃來、因何不救狗身之苦。目連啓言、慈母、由兒不孝順、殃及慈母、墮落三塗、寧作狗身於此、你（寧）作餓鬼之途。阿孃喚言、孝順兒、受此狗身音啞報、行住坐臥得存。飢即於坑中食人不淨、渴飲長流以濟虛。朝聞長者念三寶、暮聞孃子誦尊經。寧作狗身受大地不淨、耳中不聞地獄之名。（世尊よ、母は飯を喰らわば火となり、水を飲めば火となるも、世尊の慈悲を蒙りて、母の火難の苦しみより救われました。七月十五日に食事にありついてより、母の姿を見ておらず、地獄に墮ちたか、はたまた餓鬼の道にありしか。世尊は答える。汝の母は地獄にも餓鬼道にも墮ちてはおらぬ。汝の読經の功德と盂蘭盆を造りし善根を得て、汝が母は餓鬼道に轉じて、王舍城にて黒狗に転生しておる。汝が母に見えんと欲するならば、分け隔てなく次第に乞食し、

貧富を問うことなかれ。富豪の門前に行かば、黒狗の出でて、汝の袈裟を銜え、人語をなすのが汝の母である。目連は仏の教えを賜り、鉢盂を手に母を探します。貧富の別なく表通りも裏通りも遍く探したが、何処にも母は見つからぬ。さる長者の門前に、一匹の黒狗が屋敷の中から出てくると、目連の袈裟を口挟んで、人語を申すよう。母の孝行息子よ、もしも地獄冥路の中より母を救うてくれたならば、なぜ狗の身となる苦しみを救うてくれぬ。目連が申すよう。母上、息子の親不孝のせいで厄災が母に及び、三塗に墮ちるはめになりました。狗の身で人の不浄を喰らうのと、喉の渴いて長流を飲んで癒すのと、どちらが宜しいか。母が叫んだ、孝行息子よ、狗の身となり口のきけぬ報いを受けたが、行住坐臥には困りはせぬ。飢えては坑中に人の不浄を喰らい、渴すれば長流を飲んで飢えを癒す。朝に長者の三宝を念ずるのを聞き、暮れに夫人の尊経を誦えるのを聞く。狗の身となり大地の不浄を受けるも、耳に地獄の名は聞きとうない。『救母変文』

『救母經』では「諸菩薩に請うて、四十九燈を点じ、放生を行い、神幡を造立（8）することによって、『目連縁起』と『救母変文』では五蘭盆法会によって、母を餓鬼道から救出した後、母は狗身に転生した。それを仏から教示され、目連が狗身の母を探しに出るプロットである。王舎城内を乞食していると、狗が近寄ってきて目連に母であることを知らせる。記述に精粗の差があるが、内容はほぼ同様に見える。ところが、母の言動に焦点を当てて子細に読めば、実は異なっていることに気付くであろう。『救母変文』から見てゆくと、目連の母を探し当てた経緯は「行一長者家門前、見一黒狗身、從宅裏出來、便捉目連袈裟、咸（銜）着即作人語」とあり、目連が托鉢をして長者の門前まで来ると黒狗が出てきて、目連の袈裟を捉え、それを銜えながら人語を話した。『救母經』では、「目連聞是語已、挺鉢往王舎城中、呼

覓其狗。狗見目連、走出抱腰懊惱」とあり、狗は目連を見かけるとその腰に（うるさく）まつわりついた。ここで注目すべきは、狗がみずから目連に近づき、まつわりついた行動である。『救母變文』ではこの後に、母が目連に向かつて「因何不救狗身之苦」と、なぜ狗身の苦しみを救ってくれないのかと恨み言を述べる。ここに母の慳貪で自己中心な性格に変化のないことを読み取ることができる。これを踏まえて『救母經』に続いて見える母の言葉「我是師母、師是我兒」を吟味すれば、単なる息子に対する教示だけでなく、尊大で傲慢なニュアンスの含まれていることが理解されるであろう。それに対して『目連緣起』では、目連みずからが狗身である母を探し出したように読める。それに続く「我在阿鼻地獄、受苦皆是自爲」という母の言葉は自責の表出であり、「聞汝廣設盂蘭、供養十方諸佛、今得離於地獄、化爲母狗之身、不淨乍可食之、不欲當時受苦」というのは、目連への感謝の気持ちを表したもので、地獄の苦しみを思えば狗身であつても甘んじようという諦念すら感じさせるものがある。ここで母親が地獄に墮とされたのを、自らの招いた報いであつたと認めるのは、『盂蘭盆經』を始めとして、後の宝卷等に及ぶまで数多ある目連説話の中では、実は珍しい特徴であることを指摘しておきたい。

上の三点の関係についてみれば、ディテールに注目した結論として、『救母經』と『救母變文』はほぼ等しい内容であり、『目連緣起』が異なっていることが明らかとなった。ここには単にディテールに止まらず、説話の成立や伝承の系統にも絡む問題が含まれていると言えよう。

むすび

『救母経』と代表的な目連説話変文について、そのモチーフとディテールについて考察した。あまり多くの例を挙げることができなかったが、考察を通していくつか興味深い結果を見出すことができた。モチーフは同じであっても、そのストーリーの展開には作品ごとに差異があり、そこに注目すればさまざまな側面が見えてくる。目連故事の重要なモチーフの一つが母親救済のための地獄巡りである、という視点から作品を眺めると、『救母経』では地獄巡りの大半に母親が話題に上っていない特徴が判明した。それに対して『救母変文』では、地獄を訪ねてみると母はすでに次の地獄に移されて会うことができず、更に次なる地獄に向かうという、母親追跡という要素が認められた。母親追跡というモチーフは、後の目連故事を題材とした戯曲や講演文学ではストーリーの展開に広く見られるもので、重要な演出の一形式となっている。『救母変文』にその相型を見出すことができるのである。ディテールについて、狗に転生した母親と目連との出会いというほぼ同様の場面を抜き出し、ディテールを比較することによって、母親の人物形象が『救母経』と『救母変文』においては一致するのに対して、『目連縁起』では異なっていること、また、『目連縁起』では母の人物形象は変化しているが、『救母変文』及び『救母経』では母親の形象に変化は認められないことが明らかとなった。この現象を如何に解釈するかは稿を改めて論じてみたい。

注

(1) 『慈悲道場目連報本懺法』と『仏説目連救母経』について(上)(下)、『藝文研究』(慶應義塾大学藝文学会)、第八十三

号（〇二年十二月）、第八十六号（〇四年六月）所収。

- (2) 『救母経』については以下の三点を適宜参照した。宮次男「目連救母説話とその絵画—目連救母経絵の出現に因んで」『美術研究』吉川弘文館、六七年、第五冊所収。砂岡（鈴木）和子「元刊『佛説目連救母経』の口語特徴」、『駒沢女子大学研究紀要』第二号、九五年所収。吉川良和「『救母経』と『救母宝卷』の目連物に関する説唱芸能的試論」『一橋大学研究年報 社会学研究』四一、〇三年所収。

- (3) このほかにも近年、目連変文関連写本の存在が報告とれている。「目連変文」（救母変文）、石谷風『晋魏隋唐残墨』安徽美術出版社、九二年所収。「目連変文創作草稿本」（救母変文）、王繼如「敦煌文献跋語二則」（目連変文創作草稿本跋）『文献』第四期、九七年所収。荒見泰史「中国国家図書館蔵『目連変文』写本五点」、『絵解き研究』（絵解き研究会）、第十七号、〇三年三月所収。同「敦煌文献に見られる『目連変文』の新資料—北京八七一九號文書について」『東方宗教』（日本道教学会）一〇三号、〇四年所収。現在、これらの資料を用いて目連変文の成立・伝承過程を明らかにせんとする研究が進められている。本稿ではこれらの資料は用いていない。

- (4) 石破洋「目連説話における目連救母経の意義について」『金沢大学大学院文学研究科研究論集』創刊号、七五年所収。同「わが国における目連救母説話の変容」『鳥取県立八頭高等学校国語科研究紀要』第一号、七五年所収。同「中国における目連救母説話の変容」『鳥取県立八頭高等学校国語科研究紀要』第二号、七六年所収。いま、同「地獄絵と文学」『絵解きの世界』教育出版センター、九二年所収、等を参照。

- (5) 注4参照。

- (6) 参照した宝卷は以下の通り。「目連救母出離地獄生天寶卷」抄本、元末明初、中国国家図書館蔵、いま吉川論文（注3参照）に収める録文による。「目連三世寶卷」常州培本堂善書局藏板、光緒丙戌年。「宝卷」山西人民出版社所収本。段平「河西宝卷」新文豊出版、九二年所収。「目連救母幽冥寶伝」清源堂、清光緒二年重刊。「宝卷」（山西版）所収。「目連巻」杭州瑪瑙寺、光緒三年。

- (7) 句読、翻訳は入矢義高・梅原郁訳注、岩波書店、八三年、に拠る

- (8) 原文は「請諸菩薩、點四十九燈、放諸生命、造立神幡」。